

リ
ユ
ン
ケ
ウ
ス
の
夜

井
坂
康
志

目次

マリーゴールドの園

(無題)

藤棚の下で

ノクターン——夜想曲

梨の香のする里にいこうよ

舟歌

(語るにまかせよ)

田舎道とバス

川辺

泣く女兒——トヴァアロヴァ通りの幻

煙草

八雲

父へ——さようなら、井坂先生

つめたいタンブラー

柏木農場

龍を見た

アンジー

ソーニャ

バラード——大栈橋の船出

カトヴィツェにて

教師よ——Kに

アダム・チェルニアコフに捧げる詩

それにしても、月と名づけられたきみをあいかわらず月とよんでいるのは、
もしかしたらぼくが怠慢なのかもしれないね

— F・カフカ

マリーゴールドの園

天突く碧を挑発する

マリーゴールドの園

その花弁

その葉

その茎

女王の一瞥

雨に濡れ

重い空気を圧して

やはらかに世界を包む

マリーゴールドの園

自らを誇るな

ひたすらに嘆け

ひざまずけ

わが女王の永遠にかけて

(無題)

あるいはあなたは言うだろう
雨のおいがすると

夏のもったりした気が
あなたの肌をつたい
その目を潤ませ
わきしたに汗をかかせる

あるいはあなたは言うだろう
文明堂カフェのオープン席に腰かけて
その目は変わらず凛々しい

雨が
やがて
雨になる

藤棚の下で

生乾きのワイシャツのにおいが
温かいシャワーのような
夏の雨をつれてくる

きみとぼくはあの公園の藤棚に逃れる
きみのつややかな前髪から
レモンのしずくがしたたり
えもいわれぬ
トパーズ色の幻を見た

ほんとうにあったことなのだろうか

藤棚の下
真夏のフィルム

ノクターン——夜想曲

君のくちびるの
やはらかさ
さても夜ごとに
想うはそのこと

こころもち
くびをかしげて
頬をつたう
君の涙の
切なさよ

湖上にぶなの
葉を浮かべ
君の手をとり
漕ぎ出せば

君の涙よ

銀の波

皺よる湖面の
清らかさ

夜ごとに想う
寄る辺なさ

梨の香のする里にいこうよ

茜の落日を背に

いこうよ

梨の香のする里へ

ぼくらの魂の憩う

あの場所へ

オレンジ輝く小川に沿って

小道をたどれば

丘の上

下草の湿りを

足裏に感じ

いこうよ

梨の香のする里へ

茜の落日を背に受けて

雲はすみれにたなびいて

ぼくらの魂の憩う

あの場所へ

舟歌

月影よ

銀波よ

湖面よ

古の

笛の音よ

櫂をこげ

墨汁の海を

(語るにまかせよ)

涙は流るるにまかせよ

ため息はこぼるるにまかせよ

時は経つにまかせよ

万物は過ぐるにまかせよ

日々と格闘するな

早足をやめよ

息を吐け、吐き切れ

語るにまかせよ

田舎道とバス

陽ざしは代赭に

空はさ青にすみわたり

午後はそよかに風の吹く

人生をコインロッカーにあずけ

バスは埃っぽい田舎道を行く

やさしいダウン症の子を思わせる

無垢の表情をした運転手

ぼくはこころもち前屈みに

風に揺れる葦さながらに

古い磨りガラスの車窓から

草のおいも

川面の鋼も

幼い日は昨日のこと

泣いて帰った日も

死さえもまたてのひらにある

あの日の夕暮れの

幌馬車のように

人生の心地よい湿っぽさと

ひやりとする快さがここに

川辺

しめやかに

さても涼しき

永野川

血を吐く夕日を背に受けて

土手に

こぐペダル

ぼくらの影が

貧しい民家のとたんの塀に

黒く鋭く

映っている

泣く女兒——トヴァアロヴァ通りの幻

古くて厚いゴムのような下唇を
中空に突き立てて
泣く女兒よ

粘る大粒の涙は
音をたててあふれ
滝のようにひさを打ち
汗ばむちいさなてのひらは
虚空を握りしめて
ふるえている

泣く女兒よ

ともに

絶望の涙を流そう

つぶれた魂を

何も語ることなく

何も癒すことなく

ただ絶望しよう

古くて厚いゴムのような下唇を

中空に突き立てて

泣く女兒よ

この卑屈で懦弱な魂を

ともに結びあわそう

そしていつしかこのいかがわしい世界を脱して

終わりになき遠路に旅立とう

誰もいない深山に降る

誰も知らない雨のように

空白を埋めるものなき

音を持たぬ悲しみを友として

だが、それにしても

からすが鳴いたとて

見上げるものさえないのだ

女兒よ

病める二〇世紀の旋律よ

煙草

煙草の匂いがしていたよ

昼下がりの都会

空に靄

あてもなく飛行機雲が浮かんでた

煙草の匂いがしていたよ

あの時

古ぼけた映画館で

夕日の商店街で

カレーのにおい

煙草の匂いがしていたよ

真夏の黒い夜

蛙の声とプロ野球中継

網戸を透かす重い風

あのとぎ

煙草の匂いがしていたよ

八雲

地平に炎ゆらめき
蟬しぐれの激しく

古代の英雄の声
流れる山並み

おぼろな幻
八雲立つ

父へ——さようなら、井坂先生

さようなら、さようなら

井坂先生、さようなら

野道をあなたは去っていく

あなたは遠く手を振る

曇天の下

焼けた野がただはてしなく

さようなら、さようなら

井坂先生、さようなら

あなたが生まれたのは
もう遠い遠い昔のこと

大きな戦争があったころ

この国がひどい貧困にあえいだ頃

あなたは戦争を憎み

貧乏を憎み

何ものをも信じなかった

やがていく時代が去り

繁栄を、軽薄を、物質を否認し

現実を、俗世を、欲望を否認したあなたは

あなた自身からも去りゆこうとしている

さようなら、さようなら

井坂先生、さようなら

兄弟とも、親とも、子供とも誰とも和睦することなく
あなたは去ろうとしている
もの言いたげな空気の塊を残して

私は送ろう

あの焼けた杭のところまで

握手は求めない

お別れだ、永遠に

さようなら、さようなら

井坂先生、さようなら

つめたいタンブラー

私がつめたいタンブラーです
ハンマーと鉄床で鍛えた鉱石
今夜も凜と硬くとりますます

淡い黄金のピアー

泡立つポルトガル・ワイン

瑠璃色の琉球泡盛、エチオピア・コーヒー

私は世界を歌う讚美歌、レクイエム
飲み物は音楽の化身で、

酔いは信仰の別名

メフィストの夢も

リュンケウスの嘆きも

すべての音楽がここにある

私はつめたいタンブラーです

明け方の空にかかる三日月

夢幻の夜の案内人

柏木農場

蝟集する蠅と家畜の匂いがするのは
あの角を曲がったところに
小さな農場があるからだ

厚木のはずれに
ぬかるみを抜けて
泥のこびりついた長靴を横目にゆけば
くずおれる焼き杭に刻まれる

「ようこそ柏木農場へ」

滅びた記憶とともに

夕日が木陰を透かして
薄くかかっている

龍を見た

子供だった僕がある日の夕方
傘を持たずに父を迎えに
木造の田舎の駅舎についたとき
空の黒雲が急に二つに裂けた

旧約聖書みたいなまばゆい光が
まっすぐ田舎道にふりそそぎ
大粒のしずくがばらばらと
黄色い帽子のつばをうった

そのとき見た——

天空にうねる蛇のすがた
遠くてよくはわからなかったけれど
背後に黄金の雲を従えて
それはただ空中高く舞っていた

雨はやみおびただしい黒雲が
ふたたび光のふたをとぎすと
いなごの大群みたいな雲を
ひきつれて彼方に消えていった

僕はこの話を
父にもしなかった
誰にもしなかった
僕自身にさえしなかった
不思議と秘密のような気がして

自己という名の

井戸 星 森 沼 砂漠 迷路 鍵 神話 謎

アンジー

天空を仰ぎ

地平線に走れ

アンジー

世界が鋭利な刃物になっても

アンジー

現実
は夢

アンジー

そしてあの予言は成就する

ソーニャ

あの黒くつややかな
運河の畔に立つ
ソーニャ

蒼い目を蔽う

細い指

薄汚れた赤いスカート
白夜の晩に

センナヤ広場に
ぬかづき口づけし

かの地を浄めたる
天使のごとき娼婦

君の姿に
涙も凍る
ソーニャ

ロシヤの大地を
血の潔癖を
神の祝福を
その手に受けよ

ソーニャ
どうかこの祝福を
その貪しい手に受けてほしい

ソーニャ

明ける白夜と
黒き運河の
東雲に

バラード——大棧橋の船出

硬いペーヴメントを踏みしめて
この大棧橋の上

黒い夜の水平線

研ぎたての白い三日月

あるいはあの波間

すっきりと遠くに

取り巻かれる霧笛

冬の夢幻のこの一夜

君と大棧橋にやって来た
故郷からも
自分からも
遠く離れて

この冬空のバラードよ
星もしみらに光る夜
嘆きの時のあまりの長さ
さても悲しきひとくさり

胸の中にはポップ・ティラン
風に切れ切れのハーモニカ
くよくよするなよと
彼が歌えば

海は答える

霧のウォータールー・ブリッジ

風よ

涙よ

お別れよ

ハンカチを振り

船は今

かにかくに

離れ去る

カトヴィツェにて

カトヴィツェの駅の木製の椅子に
腰かける老婆

あこの皺はたるみ

その鼻先の獐猛さ

茶色い埃っぽいスカーフが

クリスマスのつめたい風になびいている

カトヴィツェの老婆

スターリン時代に娘だったあなた

小さく艶やかな黒い目だけが

可憐だった少女の歌を

今もやさしく歌ってる

革命を忘れたか

カトヴィツェの老婆

今はツェルノヴィツツの農家に嫁いだ
娘に会いに行こうというのか

あなたの姿が惹きつける

地獄のふたが開いたとき

浪費された世紀を生きたあなたが

私の胸の奥の何かを打つ

小さな手提げから

黒パンのサンドイッチをとり出して
らくだのように食べる

カトヴィツェの老婆

もう共産主義は流行らない
今は巨大なショッピングモール
イデオロギーはみんな
ネットとデジタルで
個々の神経回路に埋められた

あなたは何も翻さぬ
何ものにも動かされぬ
そして何の言葉も発せぬ

カトヴィツェの老婆
あなたはどこかしら母に似ている

教師よ——Kに

貧しき精神の農夫
田舎の教師よ

世に屈し、爛れた魂で
今日も若き心に
糜爛のパンを分かち
呪縛の酒を注ぐか

安物くさいその眼鏡
疲れた皮膚
だらしなくひらく唇

空しき哲理を語るか

検証なき教えを垂れるか

卑しき貴人

田舎の教師よ

お前の後に道はなく

お前の前に道はない

野原に潜むねずみのごとく

せせこましくかついじましく

理想という名の腐肉をあさり

知識という名の汚水を飲む

若き日々の

理想は地平に沈み

希望は永遠に去った
やわな挫折は致命傷
青き病魔は生命を蝕む

お前は戦いもせず
追求もせず

ひと山いくらの
虚ろな正義

魂のむなしさを
藁くずで埋めた

さても憐れな
田舎の教師よ

見よ枯れ草はぺんぺんと生え

からすが不吉に道案内する
人生はお前に何を教えたか
流れなき川は淀めども
お前を師と呼ぶ者はもうありはしない

精神の墓場

死んだ沼の蛭

田舎の教師よ

アダム・チェルニアコフに捧げる詩

あなたに会いにやってきた

この極寒の

ワルシヤワ外れのユダヤ人基地に

一人佇む

人からも

ユダヤ人さえからも

やがて世界からも知られず

一人執務室で毒を仰いだ

孤独な男

チェルニアコフ

あなたはワルシャワ・ゲットーの
ユダヤ人協議会の議長で

元は電気技師

誰の目にも政治とはほど遠い

だからナチスの連中も

あなたを無害と思ったにちがいない

チェルニアコフ

息子ほどのナチスの将校に

願使され

時に重い軍靴でこづかれて

あなたの生活で

世界はすでに十分過ぎるほど

失われ尽くしていた

やがてあの移送がはじまって

パヴィア刑務所に

コルチャクの子供たちが集められ

ウムラークシュプラッツから引き込まれた鉄道が

一人残らず

トレブリンカに運んだのを知ったとき

あなたは人生で初めて

内臓液の、脳漿の一滴まで

搾り尽くして

泣いたのだ

涙があなたの丸眼鏡の縁にたまり
嗚咽が執務室にこだまする

ああ絶望の涙が流れる一方で
私は願わずにはいられない
夜明けの窓に一つでも

金の星が
ちいさく瞬いたことを

少なくとも彼が
絶望の孤独の中で
死を選んだのではなかったと
そう思えるから

もうじき日は暮れる

ワルシャワの街が夜気に包まれる

もう零下だ

ユダヤ人墓地に人影はない

失われた世紀の英雄

アダム・チェルニアコフの墓碑に

ユダヤ人の古い慣例にならない

この小さな石を置いていこう